が多く，リンパ管内型では殆ど全部が再発した。即ち無簇出型のものはその腫瘍が如何に大きくても又受診までの期間が如何に長くても組織学的には初期癌であるということができる。無簇出型と簇出型は終始同一型ではなく，始めは無簇出型でも後には早晩簇出型に移行し，死期が近づくと最も高度になる。要するに早期診断された癌とは，簇出型に移行する前の無簇出型の時期に診断されたものでこれが本当の初期癌と考える。早期診断とか初期癌という言葉をこの様に理解すれば，先に述べたような矛盾をよく説明出来ると考える。

5. 故柚木教授の臨牀並に剖検所見

（内科）中山光重
（病理）松本武四郎

故柚木教授は糖尿病を20年以上に亘り罹患されていたが，昨年頃より蛋白尿，高血圧，浮腫，貧血を併発され，眼底には網膜症もみられ臨床的にはいわゆるキンメルスチールウィルソン症候群の型をとり，次第に腎機能障害高度となり，死亡された。これについて，病理学的所見を詳細に述べんとす。

6. 綜説　死後経過時間に関する研究

（法医）平瀬文子

全文を追つて本誌に掲載

東京女子医科大学々会第102回例会抄録

日時　昭和35年6月24日（金）午後2時半

場所　東京女子医大本部講堂

1. 人胎盤の解糖能について

（生化学）小野　恵・○川田展子

人胎盤について，早期胎盤，成熟胎盤，娩出胎盤の酸素消費能，酸生成能，乳酸生成能，グリコーゲン消費量を比較検討した。

成熟胎盤，娩出胎盤は早期胎盤に比し，グリコーゲン含量，酸素消費能，酸生成能，グリコーゲン消費能は減少しているが，好気的条件下における乳酸生成量は増大していた。

嫌気的条件下においてはグリコーゲンの消費量，乳酸生成量，炭酸発生量はほぼ等量である。

好気的条件下においてはグリコーゲンの消費量，酸素消費能，乳酸生成能の比率は早期胎盤ではそれぞれ約1：2：0.5，成熟胎盤では1：2：1，娩出胎盤では1：2：1.2であつた。成熟胎盤，娩出胎盤において好気的条件下における乳酸生成の増大は，グリコーゲンから他の物質への合成反応が妊娠の進行に伴い減弱して行く結果ではなかろうか。

2. 人胎盤の酸溶性ヌクレオチドの分布とP^{32}の交替について，ギ酸塩型陰イオン交換樹脂を用いる勾配溶出クロマトグラフィーによる分析

（生化学）小野　恵

Potterらが考案したギ酸塩型陰イオン交換樹脂による勾配溶出クロマトグラフィーを，人早期胎盤，娩出胎盤について行い，その酸溶性ヌクレオチドの分画を観察し，DPN，CMP，AMP，GMP，CDPとIMP，UMP，ADP，UDPAG，UDPG，ADP-X，CTP，UDP，ATP，GTP，UTPの存在を観察した。これらの分画について，娩出胎盤は早期胎盤に比し，ヌクレオシド三燐酸が比較的少く，ヌクレオチド燐酸，DPNは比較的多かつた。

また，早期胎盤，娩出胎盤をP^{32}を含む糖液と共に温置した場合についても，勾配溶出クロマトグラフィーを行い，各分画についてP^{32}の介入，酸溶性ヌクレオチドの分画をも観察した。この場合，HMP，α-GP，ATP，UTP分画にP^{32}の交替が観察された。一方酸溶性ヌクレオチド分画は温置することにより，早期胎盤，娩出胎盤においてもヌクレオチドの分画して行く像が観察された。

人胎盤においては他の諸臓器に比し，アデノシン系のヌクレオチドが多く，エネルギー代謝の活性度が高く，またウリジン系のヌクレオチドが多く，UDPを中心とした糖代謝の活性度の高いことが推察される。

3. 15才の精神薄弱児に出現したガンゼル様症候群の一例

（精神科）栗野　龍・○斎藤秀子

症例，既往歴として，おそらく出産時障害によるいわゆる脳性小児麻痺の為，軽度の弱視，左外斜視，上肢の不器用，言語発達の遅延があつた他に，教育史として幼稚園から中学まで特殊学級に通い，最終学年時のI.Q.は66という愚鈍と痴愚の境界に該当する精神薄弱の少年であるが，過保護的な環境を考慮すれば，人格年令ないし社会的年令は，ほぼ6～7才と推定される。中学年より卒業後も校外実習として某工場で極めて簡単な手仕事に従事していた。

発病及び経過。昭和34年6月下旬，胸膜炎に罹患し自宅にて静養中，8月頃より漠然とした不安，驚き易